

## 童話からみたワイルドの芸術理論

森 元 奈 菜

### はじめに

オスカー・ワイルドは、1854年10月16日に英国植民地時代のアイルランドの首都であるダブリンで生まれる。ダブリンのトリニティ・カレッジに入学した後、オックスフォード大学に留学し、そこでジョン・ラスキンの社会改革の思想やウォルター・ペイターの唯美主義の影響を受けた。ワイルドは、生涯で2冊の童話集を出版している。1888年に出版された童話集『幸福な王子、その他の物語』(*The Happy Prince and Other Tales*)には、『幸福な王子』、『ナイチンゲールとばら』、『わがままな大男』、『忠実な友』そして『すばらしいロケット』の5つの童話が収められており、さらにその3年後、2冊目となる童話集『ざくろの家』(*A House of Pomegranates*)を出版した。この童話集には、『若い王』、『王女の誕生日』、『漁師とその魂』、『星の王子』の4つの童話が収められている。その中でも『幸福な王子』(‘The Happy Prince’)は、世界中で知られている名作であり、幸福な王子の像とツバメが共に自身を犠牲にして生活困窮者に慈悲を施す物語である。一般的に、これらの童話集は、ワイルドが自身の二人の息子に伝えるために書いたと考えられている。しかし、これを決定付ける証拠はなく、また一方で、ワイルドの研究者であるジャラス・キリーンは *The Fairy Tales of Oscar Wilde* の中で、ワイルドの童話は多くの批評家から注目されていたが、ワイルドのイメージと童話の内容がかけはなれているため、他のワイルド文学とは無関係なものだと研究者から考えられてきたと指摘している (p. 1)。

童話とは児童文学を意味し、子どものために書かれた空想的な物語を指す。子どもを対象とした読み物なら、作者の伝えたいメッセージは理解しやすいものであることが前提だろう。しかし、ワイルドの童話では、子どもがそのメッセージ性を読み解くことは難しく、物語の設定にはリアリズム的要素が強く感

じられる。また、一般の童話に関する先行研究では、童話はその時代の風潮を反映していることを明らかにしており、ワイルドの描く物語世界の中でも同様に、当時のイギリス社会が反映されている。また、ワイルドの童話作品における登場人物らは肯定的に描かれておらず、むしろ、否定的な描写になっていると思われる。ワイルドは『嘘の衰退』（‘The Decay of Lying’）の中で、嘘をつくこと、すなわち、虚構の世界を構築することこそが芸術の目的であり、リアリズムというジャンルが芸術を衰退させているとしてリアリズムを非難している。文学作品をそれ自体で独立した芸術作品と考えるワイルドからすると、現実世界や事実をありのままに描くリアリズムは芸術とは言えず、芸術家自らの想像力によって現実をそれ以上のものとして新しく作り出すことこそが芸術なのだ。これらの観点から、童話作品の中でも同様に、他の作品で明らかにされてきたワイルドの芸術理論を見つけることができるのではないかと考える。

本稿では、1888年に出版された『幸福な王子、そのほかの物語』（*The Happy Prince and Other Tales*）の『幸福な王子』（‘The Happy Prince’）、『ナイチンゲールとばらの花』（‘The Nightingale and the Rose’）、『わがままな大男』（‘The Giant Man’）を主な対象とする。この3作品の中で、同時代に書かれた作品である『嘘の衰退』（‘The Decay of Lying’）の中で言及されているワイルドの芸術理論との関連性を考えていきたい。

## 『幸福な王子』

『幸福な王子』には、ワイルドの言う現代の生活が上手く反映されているように思う。物語の中で当時の社会が反映されている箇所を見ていく。この物語は、幸せに生きた王子が死後、幸福な王子の像として町の真ん中に作られ、生前は知らなかった世の中の悲惨さを知ることから始まる。その後雨をしのぐためにやって来たツバメと共に自身を犠牲にして生活困窮者に慈悲を施す物語である。この物語の設定にはリアリズム的要素が多く感じられる。周りからの評判を得たい市会議員、月がほしいと泣く子供を叱りつける母親、子供の夢を否定する数学の先生などが現実の物質主義や唯物主義の体現者として描かれている。しかしワイルドが『幸福な王子』の中に反映させたのは、このヴィクトリ

ア朝の価値観だけではない。物語には次のように病気の子どもを持つお針子が登場する。

窓が1つあいていて、テーブルに向かって座っている女の姿が窓越しに見える。顔は痩せて、やつれており、がさがさした赤い手、針の跡だらけの手をしている、針子なのでね。女王の官女のなかで一番綺麗な人が今度の宮中舞踏会で着るしゅすのガウンに、トケイソウを縫いつけているのだ。部屋の片隅の寝台に、その女の小さい男の子が病気で寝ている。熱病にかかっていて、オレンジをほしがっている。母親には、川の水しかやるものがないので、子供はおいおい泣いている。('The Happy Prince,' *The Complete Short Stories*, 73) <sup>1</sup>

このお針子という職業は苛酷な労働と薄給によって当時の人々に知られていた職業の1つである。物語の中でも疲れ果てるまで働いているにも関わらず、病気の我が子にオレンジを買い与えることもできない。川の水しかあげることができないとある。しかし、舞踏会音楽が流れる宮殿では刺繍の注文をした官女が、お針子は怠け者だからと自分の衣装が間に合うかどうか心配している。ここからも貧富の差が窺え、当時の英国社会の闇が反映されていることが想定できる。また、お針子の次に登場する屋根裏部屋に住む青年もまた、貧困を象徴する人物だろう。このように、ワイルドは物語の中で、現実の貧困問題に関して描写していることが明らかである。この童話には、現実世界の悲惨で冷酷な側面への強い関心が描かれるという、リアリズム的叙述が存在する点を、まず指摘したい。

一方で話すことのできない像である幸福な王子とツバメが会話をし、貧しい人々を救済する活動をする。このような空想的な要素があるにしても、物語のそこかしこに現実社会への関心を垣間見ることができる。また、ワイルドは書簡で次のように述べている。

『幸福な王子その他の物語』は、もちろん、ちょっとした想像力に富む物語で、子どものためだけではなく、子どものような心を持った18歳から80歳の大人のために書かれた。(Letters, 388) <sup>2</sup>

続けて、次のようにある。

『幸福な王子その他の物語』は・・・一部は子どもたちに、一部は驚きや喜びという子どものような才能を持ち続けており、とらえがたい不思議さを純真に見つけることができる人のためのものである。(Letters, 352)

またワイルドは、『幸福な王子』に含まれる物語は創造的な形式で現代の問題を扱おうとする試みだとの手紙を書いている。これらからも分かるように、この作品は、リアリズム小説が全盛期だったヴィクトリア時代に創作された物語ではあるが、英国社会の闇をリアリズム小説としてではなく、架空の物語を創造的に扱ったものだとして理解できる。ファンタジーの世界に、現実の問題を組み込むことによって、社会が持つ現実をあるがままに描くリアリズムと現実では起こりえないことを描くロマンスを一つの作品の中に共存させて成立させていることが分かる。また、『幸福な王子』の物語の中で、救いの手が差し伸べられるのは、お針子や青年、マッチ売りの少女といった貧困者である。しかし、根本的な問題は何も解決していない。物語に登場している貧困者の現状は何一つ変わらない。最初にツバメは、貧しいお針子の母親と病気の男の子の元にルビーを運ぶ。しかし、そのルビーがどのような役割を果たしたのかは描かれていない。また、ツバメはマッチ売りの女の子の元へもサファイアを運ぶが、彼女に至っては、その価値にさえ気づいていない。幸福な王子とツバメは、間違いなく自身を犠牲にして彼らを助けているが、その行動が、その後彼らをどの程度救ったのかは明らかになっていない。一時的に、彼らを助け、喜ばすことはできたのかもしれないが、その場しのぎでしかない。また、幸福な王子とツバメは、貧困者へ慈悲を施しながらも、彼らの反応やその後を気にかける描写は一切ない。自身の行動がどのような影響を与えるかに関しては、幸福な王子もツバメも、両者ともに無関心なのである。この点から、現実社会で起こる問題を童話の中で描いてはいるが、それを解決することを描くのを目的としない作品であると考えられるのではないだろうか。貧困者の現状の改革を訴えるのではなく、幸福な王子とツバメとの間に心の交流の物語が重要であり、彼らの行為によって、貧困の問題を読者に喚起しようとするからこそ、より統一された芸術作品を生み出す上で重要視されていると言える。

このことから、『幸福な王子』ではリアリズムとロマンスの2つの物語的要素から構成され则认为られる。1つは、物質主義や唯物主義の体現者として描かれた市会議員ら、そしてお針子や青年、マッチ売りの少女のような現実社会に存在したであろう貧困者を描いたリアリズム、そしてもう1つは、幸福な王子とツバメとの間の心の交流の物語を描いたロマンスである。リアリズムの観点から見た物語では、幸福な王子やツバメの施しは、何も変化を生まず、貧困問題はそのまま、解決されることはない。人々の日常には何の変化も与えられないまま、ツバメは死に、幸福な王子の像は処分され、町の描写はそこで終わる。一方で、ロマンスの側面から見てみると、その後も幸福な王子とツバメの物語は続き、神様によって、「黄金の町」と「天国の庭」に導かれることで、物語は幕を閉じる。ワイルドは、現実社会の問題が色濃く反映されている童話作品の中で、ファンタジーの虚構の世界を作り上げたうえで、実際に存在していただろう人々の姿を描くことで、ヴィクトリア朝の社会を風刺することに成功している。幸福な王子とツバメの献身的な行為により、現実社会のあり方がより顕著になって喚起されている。以上より、『幸福な王子』という1つの物語の中に、リアリズムとロマンス、それぞれ独立した物語が共存し、対立しつつも相互に結び合わされていることが分かる。

## 『ナイチンゲールとばらの花』

『幸福な王子』と同様、リアリズムの側面とロマンスの側面から、『ナイチンゲールとばらの花』を考察していく。物語の始まりで、自身の庭には、恋人に捧げる赤いばらがないと嘆き、目に涙をいっぱいにした若い学生を見たナイチンゲールは、本当の恋が見つかったと言って、感激している。そしてナイチンゲールは「私の歌うことで、あの人は悩んでいる。私にとっての喜びが、この人の苦しみののだ」（‘The Nightingale and the Rose,’ *The Complete Short Stories*, 79）と述べる。このようにナイチンゲールは、学生の気持ちに理解を示している。しかし、この反応はナイチンゲールにのみ見られる。

「なぜあの人は泣いているのかな？」と小さな緑色のとかげが、尻尾を

ぴんと立ててそばを走りすぎながら、たずねました。「なぜでしょうね、ほんとうに？」と、日の光を追って、ひらひらと飛び回っていた蝶が言いました。「どうしたんでしょうね、ほんとうに？」と、しずかな、低い声で、ひなぎくが隣の花にささやきました。」(‘The Nightingale and the Rose,’ *The Complete Short Stories*, 80)

このように、とかげや蝶、ひなぎくは、学生がなぜ泣いているのか理解を示すことはない。また、それは学生にも同様のことが言える。ナイチンゲールの姿を見た学生は「…感情があるだろうか？どうもないようだ。」(‘The Nightingale and the Rose,’ *The Complete Short Stories*, 82) と述べている。学生は、彼女の言葉を理解することができないどころか、感情がないとさえ思っている。

リアリズムとロマンスの観点から分けて考えるとすると、『幸福な王子』と同様、物語の舞台が現実を反映しているリアリズムの世界であり、ナイチンゲールが他の動植物と展開する物語がロマンスと考えることができる。ナイチンゲールは、学生のために自身の命を犠牲にし、白いばらを自らの血で赤く染める。しかし、結局、ナイチンゲールが命をかけて作った赤いばらは、宝石に勝ることはない。そして、赤いばらは学生によって、冷酷にも投げ捨てられる。この物語に登場する学生や、その学生が恋をする教授の娘は、物質主義の体現者として描かれている。一方で、ロマンス的側面に関わる面として描かれているナイチンゲールには、幸福な王子とツバメにあったような救済が描かれていない。なぜナイチンゲールは、神様によって天国へと導かれる描写がなかったのだろうか。この点は、ナイチンゲールは、芸術家として、自らの命と引き換えに赤いばらを完成させ、自身の死によって、芸術を完成させたとと言えるのではないだろうか。このように考えると、ナイチンゲールの死も1つの芸術作品を構成する出来事だと言える。

以上のように、『ナイチンゲールとばらの花』においても、『幸福な王子』と同様に、物語の中に、現実社会や人間のエゴイズムを反映したリアリズムが展開する世界と、ナイチンゲールの自己犠牲から見られるロマンスの世界との2つの側面が存在していることが分かる。また、この作品に関しても、リアリズム的側面では、学生は恋に絶望することで物語は完結し、ロマンス的側面では、自己犠牲によって物語は幕を閉じる。このように、1つの物語の中に、リアリ

ズムとロマンス、それぞれ独立した物語が共存していることが明らかである。

## 『わがままな大男』

2作品と同様に、リアリズムの側面とロマンス的側面から、『わがままな大男』を考察する。物語は次のように始まっている。

いつも午後になると、学校から帰りがけに、子供たちは大男の庭へ行って遊んだものでした。大きな綺麗な庭で、やわらかい緑の草が生えていました。その草のあちこちには星のように美しい花が咲いていて、12本の桃の木があり、春になると一斉にピンクと真珠色の可憐な花が開き、秋には豊かな実を結びました。鳥が木にとまって、とても綺麗な声で歌うので、子供たちはいつもその歌を聞くために遊びをやめるのでした。「僕たちはここでなんて幸せなんだろう」みんな互いに叫び合ったものです。（‘The Selfish Giant,’ *The Complete Short Stories*, 85）

この物語の舞台設定からは、『幸福な王子』や『ナイチンゲールとばらの花』に見られたリアリズムの側面を明白に見ることは難しい。2作品とは異なり、リアリズムとロマンスといった二項対立を明らかにすることは困難のように見える。しかし、物語世界では、庭の持ち主である大男が登場するが、その行動は多面的に描かれている。友人である人食い鬼を訪ねて、ともに7年間過ごしていたが、話も尽きたことから自分の家へと帰宅する。そこで、庭で遊んでいる子供たちを見て次のように発言する。

「わしの庭はわしの庭だ。誰だってそんなことぐらい分かるはずだ。だからわし以外は誰一人ここで遊ばせてやるもんか」（‘The Selfish Giant,’ *The Complete Short Stories*, 85）

そうして、子供たちを追い出してしまい、庭の周りに高い塀をめぐらせる。このことから、物語では大男はわがままな人物であると印象づけられているが、

実際庭の持ち主は大男であり、自分の所有物を自分のものだという発言がわがままなことだとは、かならずしも思えない。しかし、この点に関しては、ワイルドは『社会主義下の人間の魂』の中で私有財産の廃止を主張しているため、この思想を踏まえて見てみると興味深いことが分かる。その思想から、私有財産という現実社会の問題を体現する人物として大男を描き、その制度をエゴイズムにもとづいて、冷酷にも悪用した罰として、わがままな大男の庭にはその後春が訪れなくなってしまったと考えることができる。ファンタジー的な物語展開のなかにリアリズムの現実が浮かび上がる。人食い鬼の友人を持つ大男というファンタジー的な物語世界の登場人物を通して、この物語でも現実社会を風刺していると言える。

また、『わがままな大男』の物語で要となるのが、小さな男の子である。大男は、木に登れず泣きじゃくるその小さな男の子と手助けをしようと枝を低く曲げる木を見て、次のように述べる。

「なんてわしはわがままだったんだろう。やっとわかった、春がここへ来ようとしなかったわけが。あのかわいそうなちびを木のてっぺんにのっけてやろう、それから塀をたたき壊して、この庭はいつまでも子供たちの遊び場にしてやろう」。大男は自分がこれまでしてきたことを、心から申し訳なく思いました。（‘The Selfish Giant,’ *The Complete Short Stories*, 87）

このように、木の優しさを見て、大男は自身の間違いに気づく。そして、子供たちと春がもどってきた庭で、大男は木に登らせてあげた小さな男の子との再会を願う。その後、大男と小さな男の子は再会を果たすが、男の子の手のひらと足には釘の傷跡がついている。この描写は、小さな男の子がイエス・キリストとして描かれていることは明らかだろう。そして物語は、大男が、小さな男の子に天国へと導かれることによって幕を閉じる。これは、ロマンス的エンディングといえるだろう。



## 童話と『嘘の衰退』にある芸術理論との関連性

ワイルドの童話において、1つの物語の中に、現実社会を風刺するリアリズム的側面と、慈悲の施しや自己犠牲といった倫理性や宗教色の強いロマンス的側面が存在することが分かる。この1つの物語の中に、2つの対立する側面を組み込む手法は、ワイルドの芸術理論と結びつけることができるのではないかと考える。

『嘘の衰退』の中で、ワイルドは、次のような芸術理論について言及している。

芸術は芸術以外のなにものも表現しない。芸術はちょうど思想と同じように独立した生命を持っており、まったく自己の線に沿って発展する。・・・芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する。このことは人生の模倣本能から生ずるばかりでなく、人生の自意識的な目的が表現を発見することであり、また芸術は人生にある美しい形式を与え、その形式を通して人生がその本領を発揮し得るという事実から生ずるのである。  
(‘The Decay of Lying,’ *Intentions* ,54-56)<sup>3</sup>

下線部のこれらの芸術理論は、考察してきた童話作品と関連性があるように思う。童話作品の中で、リアリズムとロマンスの2つの側面に分けて考察してきたが、引用した芸術理論にある人生をリアリズム、そして、芸術をロマンスとして解釈し、童話との関係性について検討する。

まず、『幸福な王子』と『ナイチンゲールとばらの花』では、慈悲を施す行為があるが、それは行為だけで完結している。それ以上のものは何もなく、「芸術は芸術以外のなにものも表現しない」とあるように、幸福な王子とツバメ、またナイチンゲールは、それ自体だけで物語を完結させている。そして、『わがままな大男』では、2つ目に挙げた芸術理論で理解することができるのではないかと考える。わがままな大男は、自分の罪を悔い改め、そうしてイエス・キリストとして描かれた小さな男の子によって天国へと導かれる。このような、聖書におけるキリストを連想させる物語展開は、人生が芸術を模倣する

という型に基づいていると解釈できる。

このように、本稿では、ワイルドの童話作品である『幸福な王子』『ナイチンゲールとばらの花』『わがままな大男』と『嘘の衰退』にあるワイルドの芸術理論の関連性について検討してきた。ワイルドが主張する芸術理論と密接な関係をもって、童話の物語世界が構築されている可能性を見てとることができるのではないか。そうした可能性を提示するとともに、これを本論のまとめとする。

(本稿は、日本英文学会関西支部 第16回大会 [2021年12月18日] にて発表した草稿に基づくものである。)

## 注

1. Wilde, Oscar. ‘The Happy Prince’, ‘The Nightingale and the Rose’, and ‘The Selfish Giant,’ in *The Complete Short Stories*, 2nd Ed. Oxford World’s Classics, 2010. に基づき、括弧内にページのみを記す。なお、『幸福な王子』の訳文は、新潮文庫から刊行されている西村孝次訳を参考に行している。
2. Wilde, Oscar. *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. Harcourt, Brace and World, 1962. に基づき、括弧内にページのみ記す。
3. Wilde, Oscar. ‘The Decay of Lying’ and ‘The Soul of Man Under Socialism,’ in *Intentions and The Soul of Man*. Ed. Robert Ross. Dawsons of Pall Mall, 1969. に基づき、括弧内にページのみ記す。なお、『嘘の衰退』の訳文は、青土社から刊行されている西村孝次訳を参考に行している。

## 引用文献・参考文献

Killeen, Jarlath, ed. *Oscar Wilde*. Irish Academic Press. 2011.

Killeen, Jarlath, ed. *The Fairy Tales of Oscar Wilde*. Ashgate Publishing Company. 2007.

- Robbins, Ruth. *Oscar Wilde*. Continuum. 2011.
- Sloan, John. *Oscar Wilde*. Oxford World's Classics. 2009.
- Wilde, Oscar. *Intentions and The Soul of Man*, Robert Ross. Dawsons of Pall Mall, 1969.
- Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*, Penguin Books. 2003.
- 新谷好 『オスカー・ワイルドの文学作品』 英宝社、2018。
- 角田信恵 『オスカー・ワイルドにおける倒錯と逆説』 彩流社、2013。
- 西村孝次 『オスカー・ワイルド全集4』 青土社、1989。
- 西村孝次 『幸福な王子』 新潮文庫、2014。
- 富士川義之・玉井暲・河内恵子 『オスカー・ワイルドの世界』 開文社出版、2013。
- 本間久雄 『英国近世唯美主義の研究』 東京堂、1934。
- 宮崎かすみ 『オスカー・ワイルド「犯罪者」にして芸術家』 中公新書、2013。